

〔月刊〕キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2018年1月1日発行（毎月一回発行）第721号

ISSN 0286-7001

# 本の ひろば

1 JANUARY  
2018

## 出会い・人

朗読は人を作る 上田 彰

B.ゴードン 著／出村 彰 訳

『キリスト教綱要』物語 関川泰寛

## 対談書評

『NTJ新約聖書注解 ガラテヤ書簡』刊行記念  
パウロは何を言おうとしているのか？

浅野淳博＋廣石 望

マイケル・ロダール 著／大頭真一 訳

神の物語 上・下 久下倫生

鈴木恭子 著

無から有 篠浦千史

## 本・批評と紹介

新教出版社編集部 編

宗教改革と現代 出村 彰

鈴木範久 著

日本キリスト教史 山口陽一

近刊情報

書店案内

L.D.ビエルマ 著／吉田 隆 訳

『ハイデルベルク信仰問答』の神学  
加藤常昭

ローワン・ウィリアムズ 著／

伊達民和 監訳、芦屋聖マルコ教会翻訳の会 訳

信頼のしるし 中村 豊





# ギレアド

マリリン・ロビンソン著 / 宇野元詠

「2005年、ピューリッツァー賞および全米批評家賞を受賞した小説」

カルヴァンとバルトを愛読する老牧師が自らの死期を意識し、若い妻との間にもうけた幼い息子に手紙を綴る。南北戦争から冷戦期にいたる三代に亘る牧師一族の信仰の歩み。忍び寄る時代の変化。親友の息子の帰郷と妻、そして自らの戸惑い。隣人たちの人生――。

◆四六判・本体3000円

パウロはなぜ、エルサレム教会への献金運動を推進したのか？ 献金がパウロの恩寵理解の根幹に関わる問題であることを徹底的な釈義を通して解明。第一回配本の8―9章は、パウロが献金問題を詳しく論じた重要な部分。次回配本は10―13章で来年刊行予定。第三回は1―7章で数年後となる。

◆A5判・本体7000円

# 第二コリント書 8―9章

〔現代新約注解全書〕

佐竹明著 (さたけ・あきら氏は広島大学、フェリス女学院大学名誉教授)

世界最高水準の第二コリント注解がいよいよ刊行開始

12月15日

神学的巨人の生涯を、帝国の衰亡史と重ねつつ、弟子アリピウスの述懐を通して描く。「ローマ帝国末期という時代、ひとは現在の閉鎖性を突破しようとした。そうした時代にアウグスティヌスが現れたのは偶然ではないし、またその時代それじたい探究に値するだろう。この時代の歩みを、時代を代表する人びとを中心にたどり、できれば彼らの内面にも視線を投げてみたい。」(本書より)

◆四六判・本体2200円

磯部隆著 (いそべ・たかし氏は名古屋大学名誉教授)

壮大な歴史小説

# ローマ帝国のたそがれとアウグスティヌス

# いのちの水

大反響

トム・ハーパー 作 / 中村吉基 訳 / 望月麻生 絵

昔々、いのちの水の湧き出る泉があった。しかし、感謝するために建てた記念碑は次第に大きな礼拝堂となり、ついには泉がどこにあるのか分からなくなってしまった……。聖なるものを囲い込もうとする宗教の閉鎖性を痛烈に批判した寓話を、達意の訳文と、美しい消しゴム版画によって贈る。

◆B6判・本体1500円

いのちの水





## 出合い・本・人

朗読は人を作る —— 上田 彰

子ども（娘）が出来てから、本の読み聞かせに時間を割くようになった。一歳にならない内から始めているので、間もなく一年になる。図書館も活用しながら、読み聞かせによる娘の反応、そして成長の様子を見守っている。実は、絵本業界で小さな変化が起こっているようで、いわゆる古典的な昔話とは全く異なる、しかし創意工夫がなされた絵本を扱う出版社が伸びているそうだ。そのような絵本の何冊かが娘のお気に入りであり、だるまがずっこけたりパンダが銭湯に入りに行くというような奇想天外な（しかし細部が練り込まれている）ストーリーを読んでもらいたがる。かと思えば、母親が幼い頃に読んでもらった絵本が実家から送られてきて、古風な絵でリズムミカルな文章の絵本もお気に入りのようだ。主に夜寝る前に読んでいるが、最近はお棚から自分で引っ張り出してきて、まだ読めない（言葉はまだ出ない）にもかかわらず、ページをめくりながら、あーうーと読むまねをしている。

お気に入りのものを何度も繰り返し読み聞かせる。そのうちにストーリーが頭に入るので、ページは一応めくるが、字を見なくても朗読できるようにする。この点については実は迷いがあり、義理の父は娘二人を讀書で育てたという方（児童福祉の専門家でもある）であるが、自分の娘に読ませた本を孫にも読

んでもらったところ、意外にご自分の言葉に直して読んでおられることに気がついた。つまり、私は「テキスト通り」読むのであるが、義理の父は「自分の好きな文体に直して」読むのである。私はテキスト通り読むことで、作者の文体の持つ息づかいを体験し、再現することを目指している。義理の父は、きちんと伺ったことはないが、子育ての主体は自分自身なのだから自分の言葉で朗読することが当然、と考えておられるのだろう。これはどちらかが正解ということはないと思うが、もしご意見をお持ちの方がおられたらお教え願いたいと思う。

話を戻すが、繰り返し読み聞かせながら、普段自分のためにする読書とはまるっきり違うやり方を楽しんでいる。飛ばし読みなど、娘の前では御法度である。旧約聖書の時代、あるいは宗教改革の時代に、「テキストの朗読」が信仰者の内面を形作っていた経緯があるのも確かだ。最近、「聖書の素読」を教会の修養会プログラムに取り入れて好評を博している。その原体験が実は、子育てで学んだ読書体験から来ていることを、まだ教会員には説明していない。

（うえだ・あきら 日本基督教団伊東教会牧師）

# パウロは何を言おうとしているのか？

NTJ 監修者  
対談

あさの あつひろ  
浅野 淳博

関西学院大学神学部教授  
『ガラテヤ書簡』 執筆者

ひろいし のぞむ  
× 廣石 望

立教大学文学部教授

廣石 浅野さん、おめでとう。すばらしい仕事を成し遂げましたね。これは本当にスゴイ注解書で、誰かが英訳してくれないかな、と思います！

浅野 ありがとうございます、刊行前目を通してコメントをくださったこと、また励ましてくださったこと、うれしかったです。

廣石 我々を含めて六名の新約学者が監修者となり、この日本語で書き下ろす新約聖書注解シリーズ「NTJ」の企画を

係性を構築し維持するための重要な要素だね。ここでは、キリストが示す信頼性が、義認の前提として述べられていると思う。

廣石 僕も、ピステイスを、関係性概念として捉えることに賛成です。この幅広い概念が、文脈によって様々な訳語をとる。従来の「くへの信仰」もそのひとつだし、あるいは受動的に、信頼されるに値すること（「くの誠実さ」ローマ三・三等）を示す訳語も可能となる。大切なのはへキリストが信頼性を有するから、私は信頼する」といった双方向性においてこの概念を捉えること。

浅野 そうそう。本書ではガラテヤ書の翻訳として、原文に忠実な「逐語訳」と、それを日本語としてよりスムーズにした「自然訳」を掲載しています。これはNTJ全体の方針ではなく、本書独自の試みだけど、「逐語訳」ではピステイスの訳を「信頼性」に統一し、「自然訳」では文脈で訳し分けました。

始めたのが二〇一〇年でした。七年の準備を経て、宗教改革五百周年の今年、やっと第一弾『ガラテヤ書簡』を刊行できました！ それを記念して今日は、

本書に特徴的なことをいくつか伺いたいと思います。

じゃあ、ピステイスからいこうか。

## 「信仰」の双方向性

浅野 いきなり、難題だね（笑）。このギリシア語は従来「信仰」と訳されてきた

## 「律法」とは何か

廣石 先の箇所で、もうひとつ重要なのは「律法の行い」という言葉だね。パウロの律法理解に関する研究は、この数十年で大きく深まっていて、本書もそれを踏まえて書かれている。

浅野 キリスト教会は長らく、ユダヤ教を、律法にがんじがらめにされた、行為義認の宗教と理解してきました。そこから脱却して、信仰義認を打ち立てたのがパウロである、と。宗教改革

した。例えば新共同訳に「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」（ガラテヤ二・一六）とある。この訳文は明確に、人からキリストへの信仰という方向性を示しているけど、でも原文では「イエス・キリストのピステイス」と記されています。

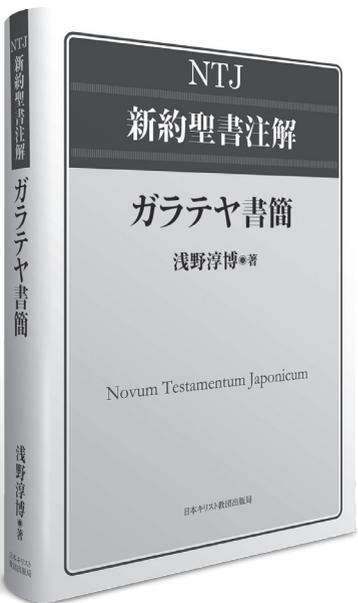
廣石 つまりギリシア語原文では、方向性が、いかようにでも取れるんだよね。

浅野 そう。この注解書では、考えた末、ピステイスに「信頼性」という訳をあてました。さっきの箇所は「人はイエス・キリストの信頼性をおして以外律法の行いゆえに義とされない」と訳しています。「信頼性」は、誰かと関

のときにはこの対立の構造が、行為義認のカトリックに対する、信仰義認のルター派という形で応用されました。この従来の理解が、本格的に疑問視されたのは二十世紀半ばになってから。

廣石 その大きなきっかけがホロコースト。キリスト教会はユダヤ人迫害を押しとどめるどころか、むしろ助長した。そこにはユダヤ教理解、特に律法理解に対する誤りがあったという反省が戦後、生まれた。

浅野 その流れの中で、一九七〇年代にE・



## NTJ 新約聖書注解 ガラテヤ書簡

浅野淳博 著  
A5判上製 / 538頁 / 通常価格6000円+税

☆シリーズ刊行記念特別価格  
4800円+税 (2018年3月31日まで)



浅野淳博

1960年生まれ。フラー神学校にてTh.M.、オックスフォード大学にてD.Phil.を取得。現在、関西学院大学神学部教授。NTJ監修者、「NTJ ガラテヤ書簡」「NTJ ローマ書簡」執筆。

P・サンダースというオックスフォードの学者が、重要な律法理解を公にしたんだね。彼によれば、律法は、ヘブライ人が救いを得るための条件ではなく、〈神の恩寵によって既に契約の中にいるユダヤ人が、いかに生きるかを示す道標〉なんだ。

つまりユダヤ教的な理解でも、あくまでも神の恵みが先行している。その恵みの選び（契約）に留まるために律法がある。そして律法に違反したとき

の償いの方策も、律法の中に入っている。それを踏まえると、フィリピ三章

六節でパウロが、自分は「律法の義については非のうちどころのない者」であつたと言っているのは、律法を完全に遵守していたと誇っているのではなくて、違反したら然るべき償いをして、契約共同体の成員としてちゃんとしていたと語っているのだと思います。

**廣石** このサンダースの理解は当時の学会では衝撃的な学説だったけど、今では専

### なぜ異邦人に？

**廣石** それはパウロが、なぜ異邦人宣教を行ったかという主題に関わっていますね。かつてフアライサイ派であつたとき、パウロも、神の救いをユダヤ人が占有しているという理解を持っていた（ガラテヤ一・一三―一四）。どうしてそこから転じたのだろうか？

**浅野** この問題を考える前提として、一世紀当時のユダヤ教自体に、民族主義とは別に、ある種の普遍主義が既にあつたことは、まず抑えておく必要がある。 **廣石** イザヤ書二章二―四節などに、異邦人も含む「諸民族」がシオンに向かうという終末の希望が記されているね。

**浅野** うん、そう。パウロは民族主義から、この普遍主義へと激しく揺れた。そのきっかけとなつたのが、「神の子」の啓示体験（ガラテヤ一・一六）だつた。もつとも当時のユダヤ教における普遍主義は律法の下での、諸民族共生だった

けど、パウロにおいては、復活したイエスが啓示されたことによって、その普遍主義がさらに進むことになる。 **廣石** 「神の子」の啓示と、普遍主義はどうつながる？

**浅野** 手掛かりの一つは、詩編二編七―八節「お前はわたしの子／今日、わたしはお前を生んだ。求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし／地の果てまで、お前の領土とする」。ここに「神の子」が地の果てまでを支配するとある。

門家の間ではほぼ共通理解になっています。しかし教会ではどうか。今なお、ユダヤ教をいちだん低く見る、昔ながらの律法理解が根強いかなとも思っています。本書を通して、日本の教会にも新しい律法理解が広まるといいな。では浅野さん、この新しい律法理解によると、先の「律法の行いゆえに義とされぬ」とはどう理解すればよいのだろうか。〈自己救済のための人間的努力が批判されている〉とのルターの理解が、日本の教会でも大きな影響力をもってきたけど。

**浅野** 本書（二一七頁以下）で詳しく論じたけど、パウロは律法それ自体を否定したのではなくて、ユダヤ民族が「律法の行い」という著しく民族的な条件を根拠として他民族を排除することを批判していると、僕は考えています。パウロはこのことを後にローマ書で、「律法への驕り」という言葉で詳述します（二・一七、一三三）。

そしてもうひとつ重要なのが、創世記二一―一七章に記されているアブラハムの召命物語。ここで神は、アブラハムと「永遠の契約」を結び、アブラハムを、諸民族に祝福が及ぶための「祝福の源」としている。

パウロは、自分の経験を、この「永遠の契約」を実現する「神の子」が啓示されたと理解した。それをきっかけに、ユダヤ民族という決定的な垣根を越えて、救いが普遍的に広がるという



廣石 望

1961年生まれ。スイス・チューリヒ大学にて神学博士号を取得。フェリス学院大学教授を経て、現在、立教大学文学部教授。NTJ監修者、「NTJ 第2コリント書簡」執筆。

日本語で書き下ろす聖書注解シリーズ 好評刊行中！  
最先端の研究成果に基づく、牧師も信徒も分かりやすい注解書

## NTJ新約聖書注解 VTJ旧約聖書注解

監修 須藤伊知郎／伊東寿泰／浅野淳博／  
廣石望／辻学／中野実

監修 月本昭男／山我哲雄／大島力／小友聡

5つの  
特長

- 1 日本語で書き下ろされており、読みやすい
- 2 原典の文書・文体・文法・語彙の特徴がわかる
- 3 聖書各書の歴史的・文化的・社会的背景がわかる
- 4 先入観に支配されず、聖書が提起している問題を理解できる
- 5 聖書の理解を通して、現代社会への深い洞察を得ることができる

### NTJ 新約聖書注解 ガラテヤ書簡

浅野淳博 関西学院大学教授



パウロの劇的な回心の背後にある、歴史と思想とを簡潔に語るガラテヤ書。本書簡を最新の研究成果に基づきつつ読み解く。パウロ神学入門の役目をも果たす、納得と新しい気づきに満ちた、聖書読者必携の書。

A5判 上製・538頁・通常価格6,000円+税

シリーズ 特価4,800円  
刊行開始記念 (2018年3月31日まで)

《続刊》『NTJ ルカ福音書1章～9章50節』嶺重 淑  
2018年春刊行予定

### VTJ 旧約聖書注解 出エジプト記 1～18章

鈴木佳秀 フェリス女学院学院長



エジプト脱出や荒れ野、啓示の出来事について、従来の歴史的・資料的視点を鑑みつつ、どのような意図でテキストを編集したかという思想的視点から考察。「エクソダス」の現代的意義を我々に問いかける。

A5判 上製・320頁・通常価格4,400円+税

シリーズ 特価3,400円  
刊行開始記念 (2018年4月30日まで)

《続刊》『VTJ 出エジプト記 19～40章』鈴木佳秀  
2018年夏刊行予定

NTJ監修者たちの研究成果が1冊に結実！あわせて読みたい好評既刊

### 新約聖書解釈の手引き

浅野淳博／伊東寿泰／須藤伊知郎／辻学  
中野実／廣石望／前川裕／村山由美

A5判 上製・338頁・本体3,200円+税

聖書を読むための各種の方法を初学者向けに概説し、その方法を用いて実際に聖書を読み解く「実用例」を紹介。NTJは本書の「実践篇」である。



日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL 03-3204-0422 FAX 03-3204-0457  
■ホームページ <http://bp-uccj.jp> ■Eメール [eigy@bp.uccj.or.jp](mailto:eigy@bp.uccj.or.jp)

#### 現代的な視点で読む

思想を追求し始めたんじゃないかな。本書（特に二七六頁以降）に詳しく書いたけど、イエスの十字架と復活は、この永遠の契約の成就に関わるというのが、パウロの確信だった。

啓示体験が、この決定的に新しい救いの理解をパウロにもたらし、それを基にパウロは異邦人宣教へと出て行く。これが大まかなストーリーだと思う。

廣石 难怪異邦人に向かったか、に関して、浅野さんはもうひとつ、パウロ自身の経験を大胆に推論しているよね。

浅野 ステファノ事件だね（使徒言行録七章）。パウロはかつての自分を「熱心者」（ガラテヤ一・一四）だったと言っている。その熱心がステファノのリンチ致死につながった。パウロ自身がこの事件にどの程度関わったかは不明だけど、僕はこの背景に、当時のユダヤ社会の殉教思想があったと思う。命

を賭して律法を熱心に守るといふ殉教思想に支えられたパウロが、かえって殺人に荷担した。殉教者が殺人者になった。このシヨククゆえに、彼は民族性の色濃い殉教思想を再考し「命を生む熱心」を切望し出した。これが遠回りにパウロの啓示体験にもつながったと思う。

廣石 本書では、戦場における心的外傷の研究なども参照文献として挙げつつ、そのことを論じているね。パウロ自身はステファノ事件に言及していないけど、浅野さんの説は説得力がある。

浅野 実は僕自身、「イスラム国」による捕虜殺害の動画をたまたま目にして、非常にシヨククを受け、二、三日、体の不調を感じた経験があります。ネット動画を見ただけでこんなだから、人が人を殺すことの衝撃は看過できないと思いはじめたんだ。

廣石 こちら辺の解釈には、現代の心理学とか社会学とかの視点が関わっているわ

けだね。現代的視点と言えば、NTJではテキストの注解に続く「解説／考察」で、現代的な適用が積極的に論じられている。これがNTJの特徴だ。ど、執筆者としては苦労したでしょう。

浅野 苦労したよ、くじけそうだった（笑）。廣石 そうだよ！でも苦労のかけがえがなかったと思う。そこにも書いてあるけど、ガラテヤ書の現代的意義って何だと思おう？

浅野 今この世界は、自国／自民族第一主義によって、とつても窮屈で危険になりつつあるという気がするんだ。このときに、パウロの越境的な思想ほど、タイムリーなメッセージはない、と言うと少し大げさすぎるかな。

廣石 まったく大げさじゃないよ。「俺たちファースト」みたいな声がかましい中で、パウロが格闘する様子から多くを学ぶことができるはず。本書を手がかりに、ガラテヤ書がもつと読まれましように！

宗教改革の歴史と現在性をスリリングに示す  
新教出版社編集部編

# 新教コイノーニア34 宗教改革と現代 改革者たちの500年とこれから



出村 彰

「宗教改革五〇〇年記念」として「喧伝」され、事実、それなりの数の出版物や集会、学会、礼拝などなど、狭義のキリスト教の枠を越えて賑やかだった二〇一七年も、残るところ一カ月となった。評者自身も、きわめて限られた範囲ではあったが、その一端を担ったことになるのかもしれない。ここで短評を依頼されたのは、『福音と世界』誌が年頭から半年間組んだ連続特集の論攷を、前記の表題で一冊にまとめたものである。

巻末の編集後記にはこうある。「宗教改革を現代の視点からあらためて捉えなおそうという意図」、すなわち、単に五〇〇年前の史実として整理するだけでなく、「宗教改革が発した神と人の関係性についての問い」を、それぞれ自分自身のものとして受け止めようという願いをもって編んだ、と。限られた紙幅の中で、四〇人もの寄稿者がそれぞれの個性を活かしながらの展開は、一見するとまるで「万華鏡」のごとくであるとしても、編集意図は十分に活かされているとの読後感は、けっして間違っていないだろう。

全体は順次、「義とは何か」、「信徒と教職」、「サクラメント」、

点是与えられそうもない……」などと、その席でも口走ってしまっただけである。

しかし、五〇〇年前のあの日、あの提題を手にした者たちは、そこから必ず「何か」を——賛否は別として——実感できたのである。ここでの「実感」とは、「気づき」と言い直してもよいだろう。気づくとは、自分自身がこれまで依拠してきた価値観（生き方）に、突如として「風穴」が開けられる体験なのではないだろうか、急いで穴を塞ごうとするにせよ、風を吹き通させるままにするにせよ……。

評者が恩師と仰ぐ神学者の熊野義孝先生が、敗戦直後刊の『マルティン・ルター——その生涯と信仰』（一九四七）において、宗教改革を「宗教から宗教への戦い……、宗教そのものの根源的矛盾の爆発」と呼んだことを忘れられない。つまり、「救済への願望、浄福祈願の敬虔」そのものが神の前で義しいのか、という問いかけである。本書の編集者が言う「神と人の

「結婚の変容」、「正統と異端」、最後に「世界史の中で」と題される六章仕立てとなっている。その中に四〇名もの、それぞれ教会的立ち位置、年配、問題志向などを異にする論攷が収められているのだから、読者の側にもそれなりの熱心さと努力とが求められるのは当然である。さらに、連載には含まれなかった四篇の新規書き下ろしによって、全体がさらに重厚さを増している。

ひるがえって考えると、これらもろもろの「焦点」は、表現法こそ異なっても実は、狭義の「宗教改革」の発端とされるかのルター「95箇条提題」の中で、すでに明言、あるいは暗示されていることに気づかされるのは、評者だけだろうか。わたくしごとで恐縮だが、評者はい先日、ある場所で（厚かましくも）「皆で読もう95箇条提題」などと銘打った講演を試みた。無論のこと、そのためには自身でも幾度かの読み直しが必要だったが、読めば読むほど、その論点があちこち飛躍したり、詳述・省略が繰り返されたりしていることを実感せざるをえなかった。つい「もしも、これが卒論か何かだったら、とても合格

関係性についての問い」も、実はこの指摘とあい通ずるのではないだろうか。

評者が本心に心強さを感じたのは、本書の寄稿者たちが、少数のいわばベテランの執筆者を別とすれば、多くが六〇年代、七〇年代、まれには八〇年代生まれの新進気鋭の「若手」だという事実である。気取った言いぐさかもしれないが、「宗教改革する」とは、どのような立ち位置から、どのような方法に依拠しようとも、今・ここで、しかも未来を見すえつつ、「宗教から宗教を問う」ことだとすれば、一見したところ「宗教改革エンサイクロペディア」とさえ思われる本書も、それだけに起爆力を持っていると言ってよいだろう。寄稿者たちの圧縮された文章力に感謝と賛嘆の念を惜しまない。

(でむら・あきら＝東北学院大学名誉教授)  
A5判・三二六頁・本体三二〇円＋税・新教出版社

## 神学ダイジェスト123号

急速な変化を遂げる現代社会。その中において、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2017年12月発行  
A5判112頁  
定価630円(税込)

特集 社会教説と教皇フランシスコ  
巻頭言 社会教説とは  
教会の社会的識別と現教皇  
教皇フランシスコと「民の神学」  
カトリック社会教説と労働正義  
キリスト教信仰とヒューマニズム  
社会の構造的罪とは何か  
愛と沈黙  
(第七回)『正教神学概論』聖霊の働き  
ルターの聖書積義と宗教改革

J・フェアシュトラーター  
M・シーゲル  
J・C・スカノーネ  
C・F・ヒンジオ  
J・M・ベルゴリオ  
D・K・フィン  
W・G・ジャンロンド  
V・ロスキー  
T・ゼーディング

上智大学神学会  
神学ダイジェスト編集委員会  
東京都練馬区上石神井4-32-11  
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349  
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

教派の展開と多岐にわたる研究から成る通史  
鈴木範久著

## 日本キリスト教史 年表で読む



山口陽一

『内村鑑三』（岩波新書、一九八四年）の、奥行き深く人間味ある研究に触れ、立教大学に鈴木範久氏の門をたたいたのは一九八七年だった。『日本キリスト教歴史大事典』の「日本キリスト教史年表」作成に関係した講義を受講したことを懐かしく思いながら、待望の日本キリスト教史の「通史」を手にした。

著者の専門分野は宗教学・日本宗教学であり、『明治宗教思潮の研究——宗教学事始』（東京大学出版会、一九七九年）はその代表的著作である。しかし、多くの読者は内村鑑三研究において著者の名を思い起こすだろう。『内村鑑三日録』全十二巻（教文館、一九九三—一九九九年）、『内村鑑三の人と思想』（岩波書店、二〇一二年）はその結実である。また、膨大な日本キリスト教史研究は、『聖書の日本語——翻訳の歴史』（岩波書店、二〇〇六年）、『聖書を読んだ30人——夏目漱石から山本五十六まで』（日本聖書協会、二〇一七年）他により広く知られている。鈴木氏の著作は、いつも新しく類似の本がない。しかし、本書にはこれまでの業績が凝縮される。枠組みとしては『日本キリスト教史物語』（教文館、二〇〇一年）、内容としては『信教

の自由の事件史——日本のキリスト教をめぐって』（オリエンス宗教研究所、二〇一〇年）と重なる部分があるが、そこにも入念に手が加えられている。

鈴木氏は言う。「自分にとって日本のキリスト教史の領域は、さながら、もがき苦しむ荒野にひとしかつた。先学の成果に少なからず影響は受けても、どこか違うという感じを拭いきれなかった」。多くの日本キリスト教史は教派や教師の視点からキリスト教の自己展開を描くが、鈴木氏は、「広く日本の文化的、社会的広がりの中でキリスト教の影響や役割を考慮」し、「日本における聖書の思想の、広義の文化的展開をもって」日本キリスト教史としている。それは国家・村落共同体との交渉であり、「キリスト教は、併呑され、懐柔され、屈服され、ささやかな抵抗を重ねてきた足跡の歴史といえる」（三七二頁）。著者は「ささやかな抵抗」と言うが、本書には日本にキリスト教がもたらされたことの「ささやかではない」意味が語られている。

日本の宗教政策との関係でなされる時代区分は、元号や「発

展」「沈滞」「苦難」「復興」というようなものではなく、「禁制と潜伏」「開国と再来」「黙許と第二維新」「公許と制限」「監督下の抵抗と順応」「公認下のキリスト教運動」「軍国化と岐路」「統制下の戦争協力と弾圧」「自由と新出発」（三一—二一章）となる。各章にはその時代を特徴づけるテーマを扱う一〇前後の「節」があり、史料に依拠してコンパクトに記される要点に唸らされる。平田篤胤の『本外教篇』など難解な文献の急所が押えられ、陽明学がキリスト教への媒介となったという定説に対して、キリスト教から陽明学への歩みもあることを明らかにするなど、各所で独自の見解が示される。「無教会主義キリスト教は、世界のキリスト教史上において、少なくとも意義の上ではルターの宗教改革に匹敵する」（一七三頁）、「天主」を「神」に改めたことは『カトリック要理』（一九六〇年）の最大問題（三四九頁）など大胆な評価があり、裏歴史のような出来事がクローズアップされ意義づけられる。「キリスト教の譯者

たち」「高梁教会事件」「巢鴨監獄教誨師事件」「青年之福音事件」「大逆事件と蘆花の「謀反論」」「新渡戸稲造の松山事件」「ゴーストシップ事件」「奄美大島事件」などである。あるいは「キリスト教私塾の役割」「キリスト教の村長たち」などの著者ならではの視点もあり、終章では、日本という共同体にあって「屹立した」内村鑑三と「水平的に越境した」遠藤周作を位置づけ、この両者からの距離を日本キリスト教史の指標としている。

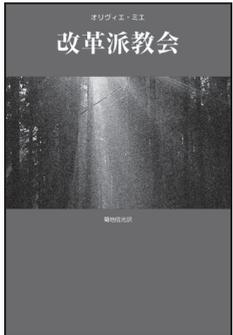
巻末には二〇一七年までの「日本キリスト教史年表」最新版（全二〇五頁）がおかれている。本書はここから九七の出来事を選び出して「年表で読む」形をとり、多くの教派の展開と多岐にわたる研究のゆえに至難の業と思われた「日本キリスト教史」の「通史」を説得力をもって（よ）に成立させた。

（やまゆち・よういち 東京基督教大学教授）  
（A5判・五〇四頁・本体四六〇〇円＋税・教文館）



## 改革派教会

オリヴィエ・ミエ  
菊地信光\*訳



改革派の思想の誕生から  
教会へと形成され、  
ひとつの教派として  
確立されていく過程を、  
信仰告白・教会規則を  
もとにひもとく。

A5判・並製  
定価【本体 2,000 + 税】円  
ISBN978-4-86325-107-6



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)

教会一致の道しるべ  
L・D・ビエルマ著  
吉田隆訳

## 『ハイデルベルク信仰問答』の神学 宗教改革神学の総論



加藤常昭

『ハイデルベルク信仰問答』は、教会の歴史における奇跡のようなものである。未信の女性が教文館を訪れ、たまたま売り場で私の『ハイデルベルク信仰問答講話』を手にとった。装丁の美しさに惹かれたそうである。そして信仰問答の言葉に捉えられ、教会を訪ねるようになり、遂に洗礼を受けた。こんな風に今も日本の地で伝道する力のある書物は、そう多くはない。

改革派の教会は、それぞれ自分が置かれた土地に根を下ろし、その時代に生きようとする教会のために信仰の基準になる文章を発表してきた。従って、改革教会が生んできた信仰告白、信仰問答は数が多い。そのひとつとして、一六世紀、プロテスタント教会が各地に生まれたときドイツのネッカー河畔、ハイデルベルクを首都とするプファルツ公国でその地に立つキリストの教会を確立するために教会規定を定め、礼拝の姿勢が整えられ、そこで告白すべき教会の信仰をカテキズムとして発表した。『ハイデルベルク信仰問答』である。

『ハイデルベルク信仰問答』成立において主として働いたウルジヌスは、ヨーロッパの信仰の土壌のひとつであったプレス書は『ハイデルベルク信仰問答』の神学を論じるのに、副題が示すように、この信仰問答こそ、当時のプロテスタント改革がもたらした神学・信仰の総論に他ならないと言った主張の書であり、それを丁寧に見証して見せるのである。

特に聖餐論に象徴されるように、ルター改革から生まれた諸教会の間の実践的・神学的対立は既に顕著で、教会の姿も異なり、收拾がつかないと思われた。その対立の悲劇の遺産に、われわれが今も悩んでいるのだとも言える。そこで、しかし、『ハイデルベルク信仰問答』は既に対立を超えて一致する道を示していたのだと言う。だからこそ、改めてこのパースペクティヴにおける検討をして見せている意味があるのである。慰めから始め、信仰問答全体を、その視点から分析していく叙述はおもしろい。既に問1とルターの『小教理問答』との比較だけでも興味深い。福音を慰めとしたのは牧会的な捉え方から来るとし、聖書そのものに聴いて、失われた者の神による発

説教黙想 アレティア  
特別増刊号

# 受肉の驚き

今、クリスマスに語るか

好評発売中

心新たにクリスマス語り伝えよう

イエスの受肉という驚くべき恵みの知らせ。聖書に聴き、神学に学び、そして絵本やマンガ、音楽など様々な芸術を通して、クリスマスに驚こう。クリスマス説教作成の手引きも収録。 B5判・128頁・2000円

## 主日礼拝の祈り

越川弘英／吉岡光人 監修

主日礼拝での祈りの例文集。各主日と祝祭日の「開式の祈り」や「行事の祈り」、「執り成しの祈り」や「奉献の祈り」などを収録。礼拝奉仕者必携！  
B6判 上製・136頁・1,620円

## このえほん だいすき!

読み聞かせのための48冊  
細川和子 「おはなしと絵本の会」代表  
長く読み聞かせに携わってきた著者が、子どもにとって「楽しい」ことにこだわり、国内外の48の名作を紹介する。絵本選びの悩みを解決する1冊。  
四六判 並製・134頁・1,404円

**日本キリスト教団出版局**

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigyoku@bp.uccj.or.jp 《価格8%税込》  
<http://bp-uccj.jp>

ラウに生まれ、ヴィッテンベルクで学び、故郷プレスラウで教師をするまでに、ルターだけではなくメランヒトンにも感化を受け、その点で純正ルター派に疑われ、やがてスイス改革派を尋ねる旅をし、ハイデルベルクで神学を教えるようになり、信仰深く、政治的感覚にも優れていたフリードリヒ三世と出会い、『ハイデルベルク信仰問答』を産むに至ったのである。

本書は、このカテキズム成立の歴史的・神学的経緯に視線を集める。パースペクティヴは明確である。著者は二〇一三年、同じ訳者によって紹介された『ハイデルベルク信仰問答』の入門書の編著者として馴染み深いものである。『ウェストミンスター信仰問答』とともに『ハイデルベルク信仰問答』を大切にしてきた北米キリスト改革派教会(CRC)の神学者である。訳者は、本書は『ハイデルベルク信仰問答』入門』の姉妹編だと言うが趣はかなり異なる。ちなみにCRCは日本キリスト改革派教会と緊密な関わりを持つ教会であり、訳者は神戸改革派神学校の校長である。

ビエルマは驚嘆に値する博識を生かして何をやったのか。本

見の物語を語る『ハイデルベルク信仰問答』は、今改めて教会一致への道しるべとなるのだと、この改革派の神学者は言う。もとよりカトリック教会と戦わざるを得なかったので問80に代表されるように、今日のエキュメニズムの視点から見れば限界はあるが。

日本でも改革派の伝統に生きる諸教会が『ハイデルベルク信仰問答』を愛してきた。しかし、同時に教派の相違を超えても愛用されてきたのではないか。それを促す信仰問答なのである。多忙の中で翻訳の労を取られた訳者に謝意を表したい。

(かとう・つねあき 神学者)  
(A5判・三八四頁・本体三七〇〇円+税・教文館)

前カンタベリー大主教が説くキリスト教の神髄  
ローワン・ウィリアムズ著  
伊達民和監訳 芦屋聖マルコ教会翻訳の会訳

### 信頼のしるし 信経とは何か



中村 豊

本書は、前カンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズが二〇〇五年の聖週（復活日前の一週間）に、英国カンタベリー大聖堂でおこなった講話をもとにして出版されたものである。この度、日本聖公会芦屋聖マルコ教会翻訳の会の尽力により、三〇冊以上の著作があるローワン・ウィリアムズの本が初めて日本語に翻訳されたことを感謝する。まず、日本ではあまり知られていないローワン・ウィリアムズについて、簡単に紹介したい。

哲学者、神学者、聖職者、教師、作家、詩人で、少なくとも六つの言語を習得済みのローワン・ウィリアムズは、一九五〇年、北ウエールズのスウォンジで生まれた。一九七八年に聖公会の司祭に按手され、弱冠三六歳で、一五六〇年創設のオックスフォード大学神学担当教授 (Lady Margaret Professor of Divinity) に招聘され、一九九〇年に英国学士院会員に選出されている。ウエールズ聖公会首座主教に就任後、二〇〇二年に第一〇四代カンタベリー大主教に選ばれた。初代大主教聖オーガスチン以来、最初のウエールズ人大主教誕生であり、一三

世紀半ばから連綿とイギリス聖公会出身者が占めてきた大主教座に、他教会出身者のウィリアムズ主教が初めて着座した。

全世界で反響を呼んだ『キリスト教の精髄 (Mere Christianity)』の著者C・S・ルイスが「未信者である隣人に対してわたしがなし得る最善で唯一の奉仕は、あらゆる時代を通して、キリスト者が共通に抱いてきた（まじりけのないキリスト教、mere Christianity）信仰を説明し、かつ弁護することである」と七〇年前に述べたことを念頭に置きながら、ウィリアムズ大主教は、全能の神への信仰から、来世の命への望みを告白する信経（使徒信経・ニケア信経）を通して、現代世界に適合したキリスト教信仰の神髄を説明している。

「全能の父」とは、「万物の支配者・所有者」という意味であると本書は言う。これはつまり、不条理な世界にあっても、神の無償の愛は決して尽きることはないし、如何なる犠牲を払っても、ご自分の意志を伝えようと人間の心の扉を開こうとされていることを表している。この愛を人間世界に伝えるため、神を信頼するに値する存在と信じていたマリアの同意によって、

神の子イエスの受肉は実現した。このイエスのなかに、神の意志と目的が内在し、イエスは、平和と賛美、和解と喜びを人間世界にもたらした。しかし、人間性の根幹にある混乱状態に終止符を打つことができず、人間の自己防衛のためにイエスは排斥され、十字架に死んだのである。ところが、この十字架は、神が、苦難にある私たちに寄り添おうとする意志のしるしとなつた。

復活のキリストによって授与される神の息吹により、神の意志を人びとに伝えるため信仰共同体が設立された。しかし、キリスト者が自らの言葉と実践にある根本的な意味合いを見逃してしまい、幾たびか、教会は本来在るべき姿から逸脱してしまつた。人間の尊厳、良心の自由、圧政の悪、女性の社会的地位などは、主として外から教会につきつけられている概念であった。しかし、教会は、私利私欲を持たず、神自身がそうであるように、平等で自由、愛のある共同体として人目に映る潜在能

力をもっており、私たちは神が計画されている未来を、教会のなかではつきり見ることができるのである。

イエスの肉体はこの世界に残されずに天に昇り、この世界と連続性を保ちながら、非常に異なった存在に変えられた。同じように、私たちも来世へのいのちに与る希望を抱いている。

最後に著者は、人間のもつ、利己主義と自己満足の最後の片鱗が払拭され神の前で裸になるよう、私たちに黙想を薦めている。

キリスト教信仰の入門書として、本書が、キリスト者やキリスト教を深く知ろうとする人たちに読まれることを期待する。

（なかむら・ゆたか「前日本聖公会神戸教区主教」  
四六判・二〇二頁・本体一八〇〇円＋税・教文館

#### 門叶国泰著

（日本基督教団 聖見町教会長）

### 説教聴聞録

藤盛勇紀牧師の礼拝説教

ルカによる福音書

ヨヘル新書045 日毎のデポジション！  
牧師の説教、信徒の聴聞——  
御言葉をめぐっての真剣勝負が  
礼拝の場では起こっている！  
新書判・三八四頁・二〇〇円

藤盛勇紀師（日本基督教団 聖見町教会牧師）

……わたしが富士見町教会に赴任した翌年に「説教聴聞録」ローマの信徒への手紙が出版されましたが、率直に言って、やはり凄い長老がいるのだと思えました。とくに「説教とは何か」ということを良く理解した上で「聴聞録」とし、「聴聞学」「聴聞力」への展開を期しておられることに唸られました。（聴聞録によせて「より」

### 落ちこんだら

正教会司祭の処方箋171

\*絶対発売中！

聖書の人物たちも、最も偉大な聖者も、教会の聖職者たちも

……みんなが「落胆」の経験者。でもたいじようぶ、171のアイテム！な処方箋があなたの落ちこみを、希望への足がかりに変えてくれます。  
四六判・二〇四頁・一六〇〇円

株式会社ヨベル YOBEL Inc.  
お問合せは info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1  
TEL03(3818)4851 (本体税別表示)  
\*自費出版の専門出版社\*資料・星

『綱要』から見るプロテスタント神学思想史  
B・ゴードン著  
出村彰訳

『キリスト教綱要』物語  
どのように書かれ、読まれてきたか



関川泰寛

本書は、カルヴァンの『キリスト教綱要』が、どのように書かれ、また出版以来どのように読まれ、評価されてきたかの歴史を描いたものです。しかも、通り一遍の歴史ではありません。人類の知的遺産と呼ぶべき書物が、時代によっては、ほとんど完全に忘れ去られるどころか、セルベトを処刑した「張本人」の人格の投影のように、ほとんど無視されるか唾棄すべき書物として斥けられてきた事実とともに、時代によって、驚くほどその評価が変遷してきた歴史を描きだします。これは、カルヴァンの祖国フランスでも例外ではありませんでした。歴史を振り返ると、読者は、カルヴァン神学とその評価についても一筋縄ではいかないほど複雑な内容を持ち、時代によって、その評価が両極を揺れ動くほどに、多様なものであったことを知る事ができます。

著者のゴードンは、一九六二年にカナダで生まれ、スコットランドのセント・アンドルーズ大学において宗教改革研究で博士号を取得し、同大学教授、宗教改革研究所所長などを歴任した後、二〇〇八年からエール大学の教授をつとめる、本書を執

筆するにもつともふさわしい人物と言えます。本書を読むと、カルヴァンの『キリスト教綱要』を、諸神学思想の往来する交差点において、定点観察するような趣を感じます。あるいはカルヴァンの『キリスト教綱要』という窓から見たプロテスタント神学思想史と言ってもよいかもしれません。本書の視点そのものが実に興味深いものです。カルヴァンに慣れ親しんでいる読者も、新しい事実をたくさん教えられることでしょう。

さて、一八世紀のヨーロッパでは、ほとんど忘却されていた『キリスト教綱要』は、シュライエルマッハーや一九世紀のアメリカの神学者と文学者によって、不死鳥のようによみがえります。メルヴィルの『白鯨』と『キリスト教綱要』の関係など、アメリカ文学史とカルヴァンの意外なつながりも本書では指摘されています。

また、一九世紀のアメリカでは、ドイツ改革派教会のネヴィンとそれに対立するプリンスストンの神学者たちの間に交わされた激しい論争、マーサースバーク神学論争が、カルヴァン神学の解釈に新しい展望を拓き、改革派教会の分裂を促しただけ

なく、新たなエネルギーを提供したことは、改革派の伝統に連なるすべてのクリスチャンの伝道と教会形成の今日の可能性をも示唆するものです。

カルヴァン解釈の大論争と言えば、カール・バルトとエミール・ブルナーの自然神学論争をすぐに想起します。二人の関係を断ち切るほどの世紀の大論争もまた、カルヴァンが自然啓示を認めているか否をめぐってのものであったことを知らされます。かつて東京神学大学の歴史神学の教授であったヘッセリンク先生が、二人の晩年に、失われた親交を回復させるべく試みを行った貴重なエピソードも紹介されています。

さらに、現代中国や南アフリカの諸教会の神学的支柱を提供したのも、カルヴァン神学でした。二〇一七年一〇月に、宗教改革五百年を記念して、日本基督教団改革長老教会協議会の招きで来日したワン・アイミン（王文明）先生についての言及もありません。現代中国で急速に拡大するキリスト教会の神学的な基盤として、カルヴァン神学と『キリスト教綱要』が果たしている役割の重要性にまで本書は言及しています。実際私も、ワン・アイミン先生から、今や一億人にも達する勢いの中国のク

リスチャンと教会の課題は、歴史的なキリスト教の教理と信仰に根ざした教会の形成であり、そのためにカルヴァンの神学やカイパーなどの新カルヴィニズムの領域主権論などの神学的な貢献であると直接にうかがいました。

読者は、生き生きとした叙述に魅了されて、いつきに本書を読むことになるでしょう。神学を学ぶことの面白さを感じる書物であると同時に、宗教改革五百年の記念すべき年に出村彰教授によって、いつもながらの流麗な訳がなされたことを感謝したいと思います。

本書には、日本におけるカルヴァン神学の受容の歴史や、トランスをはじめとするスコットランドにおけるカルヴァン受容などへの言及がないという欠けもあります。これらを補って、カルヴァンの『キリスト教綱要』を今日どのように評価するかは、わたしたちの大きな課題となるでしょう。最後に、二六九頁の二箇所「タン」は、「ワン」の誤植と思われるので、改訂の際は訂正されることを期待します。

（せきかわ・やすひろ 東京神学大学教授、大森めぐみ教会牧師）  
（四六判・三三〇頁・本体三三〇円＋税・教文館）

キリスト教神学全体を、聖書を物語りながら、その課題へと読者を導き、考えさせる！

マイケル・ロダール著  
大頭眞一訳

## 神の物語上・下



久下倫生

私は、関西凸凹神学会という、すこし変わった名前前の超教派の牧師の勉強会を、五、六年前から主催している。神学について学ぶのではなく、神学する会である。

貧しくとも、自分の頭と体（信仰生活）を最大限に使って考える。この会の中心メンバーである大頭眞一牧師が心血を注いで翻訳して、二〇一一年出版したマイケル・ロダール著『神の物語』が、今回装いを新たに、版元を変えて再出版されることとなった。それだけ継続して読まれていることを、うれしく思うと同時に、この際さらに広い範囲の方々に読んでいただきたいと思っている。初版が出てしばらくしてから、私も大頭牧師も所属する説教塾の仲間にも紹介したが、どなたからも反応がなかったからである。同じ説教塾の仲間が訳したにもかかわらず、だれも読まない、あるいは感想も言わないことに失望した。わたしが所属する教団の牧師もほとんど読んでいないと思われる。読まない理由は、出版社名が、「聖化協力会」という聞きなれない名前だったこと、本の帯に書いてある宣伝文句が、「待望のウエスレアン神学概論」となっていたから

である。ほかに、およそ普通の牧師・信徒なら読む気をなくすであろう、「開かれた聖餐、東方神学、共同体としての聖化」など、おどろおどろしいキーワードが踊っていたからである。仕方がないとも思えた。日本の福音派は、フィリップ・ヤンシーの表現を借りると、かつて口汚く主流派をのりしり、自分たちの聖書観だけを正しいとし、洗礼を受ける客観性よりも、主観的な「心から信じる」ことを重んじ、ベトナム戦争や、イラク戦争を支持し、女性関係のみだらなテレビ説教者をほめたたえ、億万長者の牧師の扇情的説教を熱狂的に支持してきたからである。そういう人々は、ウエスレアンを自称し、聖化を強調する場面が多かった。

しかし、いま日本の福音派は、信じられないくらいに速度で、新しく生まれ変わろうと努力している。本著は、本来の意味でのウエスレアンの立場で、易しい言葉で聖書神学と組織神学を融合させながら、現代人との対話を試み、東方の霊性やイースラムまでをも含んだ大きな視点で、神学と信仰生活が一つとなる生き方を提案する入門書である。科学に対する態度も立派で

あり、進化論を頭から否定したりせず、妄信的、教条的ではない。聖餐に関して、未受洗者の陪餐を容認する特殊なケースを想定するなど、私には受け入れがたい考えも二、三はあるが、全体としては極めて優れた書物である。聖書を解き明かしながら、神学の本題、神学の課題へと読者を導き、考えさせる。自分とは違う立場の神学をよく読むことで、自己理解は大きく進むし、よい刺激を受ける。私はかつて福音派に近かったが、嫌気がさして主流派で牧師となったので、ロダールの主張は、驚きである。こういう人もいるのだなど。

「物語」、あるいは「神の物語」とは、今はやりの言葉である。しかし本著は、流行に乗った神学書ではない。全く立場は異なるが、水野隆一著『アブラハム物語を読む』と似て、聖書学の知識を使って、読み手を刺激し、挑発する書物である。あなたはどう読むか、「正しい読み」があるのだろうか。かといって文芸批評的ではなく、かつての福音派の主張である、「聖書にはそんなことは書いてない」という思い込みを打ち砕き、「聖書の読みは開かれている」と主張する。著者はオープンという言葉を使うが、背景に、オープン・セオロジと呼ばれる

現代の神学的主張がはつきり読み取れる。著者、訳者とも一言前なら、裏切り者、左翼かぶれ、リベラルと批判されたであろう。

なお、蛇足ながら、最近の福音派の健全な聖書観を知りたい方には、藤本満著『聖書信仰』と、中澤啓介著『被造物管理の神学』をお勧めしたい。

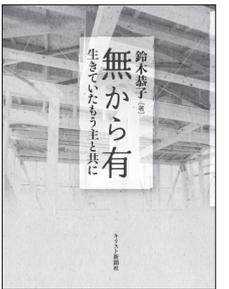
最後に、翻訳について特記しておきたい。神学書の中には、翻訳について、首を傾げざるを得ないものや、時には怒りすら感じるものがある。つい誤訳してしまったのではなく、いい加減に、わからないことをごまかして訳してあるからである。しかし、本書は、なんと馬鹿正直に十年の歳月をかけて、理解しにくい点はすべて著者に確かめて、間違いないようにしたと訳者は語っている。推薦する責任上、原著を取り寄せ細かく点検してみたが、私の調べた限りでは翻訳に誤りはなかった。安心してお読みください。

くげ・ともお 日本基督教団マラナ・タ教会牧師、関西凸凹神学代表、  
ペテル聖書研究会委員

（新書判・上三三〇頁、下三〇四頁・本体各一四〇〇円＋税・ヨベル）

神に全てを委ねることの素晴らしさ  
鈴木恭子著

### 無から有 生きていたもう主と共に



篠浦千史

鈴木恭子牧師と私は奇しくも同じ時期に日本基督教団(以下教団)の教区書記に選任され、恭子師は大阪教区で、私は四国教区で全体教会の働きに参与するという、出会う前から不思議な縁で結ばれていたことを後になって知りました。穏やかな四国教区と違って、激動の大阪教区で女性教職がその任に当たるのは、本当に大変だっただろうと想像しました。ところが、そのあたりをサラリと言っているのが彼女の凄さだと思えます。恭子師に初めてお会いしたのは、教団の伝道委員長会議での席上でした。物怖じしないで思ったことをはっきりいう彼女の賜物は、その時も遺憾なく発揮されていました。その後、教団の「障がい」を考える小委員会の働きを一緒に担いました。その中で、それぞれが違わされている現場の問題、課題について心置きなく話せる良き友として、友情を培ってきました。そこでお聞きしていた彼女の人生の断片が今ひとつつながって、この本で語られています。

恭子牧師の伝道牧会の日々は、まさに捧げ尽くした者の強さとも言いましょうか、無から有を神から見せていただく造です。それは、彼女がというよりも、神が必ず成し遂げて下さるとの信仰の証であります。人間の常識では決してあり得ないことを、彼女はその信仰ゆえに何度も見せていただくのです。せっかくながら、あつさり次の道へと突き進みます。神に示されて結婚を決定した折には、牧会者の道から少し離れ、違った分野で仕事をしますが、そこでの経験がその後の彼女の伝道者としての働きを豊かなものにしていきます。

伝道者としての歩みを再開する時、神から与えられた人生のパートナーもまた、志を与えられて伝道者の道を共に歩むことになりました。本当に神のなさることは、その折にかなって素晴らしいと思わされます。それぞれのお母様が九十才を超えると、その支えになることも考えて、恭子牧師の故郷に近い下関に伝道の拠点を移されます。お二人のお母様はどちらも百才を超えて天に召され、子としての務めを立派に果たされました。

この連続でした。福岡の開業医の家に生まれたお嬢さんで、何の苦労もなく育ったように見えます。けれども、実際は周りの方々に献身的に仕えたお父様ゆえに、経済的には慎ましく育てられました。そんな父親の姿を見て育った彼女は、神に仕える姿勢を幼いうちから養われていたのかもしれない。病弱に育った彼女が次第に精神的にも肉体的にも強められていく姿は、神が彼女を用いられようとしたことの証です。伝道者となって遣わされた教会での物理的な環境は、今と違って世の中全体が豊かでなかった時代にあっても、過酷といってもいいほど酷い環境で、若い女性牧師には大きな試練だったと思います。神はその環境にも適応できるように、彼女に必要な体力と気力をお与えになったのです。

大きな教会の伝道師としての務めを経て、小さな教会に遣わされるのですが、初任地での青年会の仲間たちは、その後の彼女の伝道活動を何度も支えてくれたようです。十人に満たない教会に遣わされる毎に、自分の持てるものを全て捧げて、会堂を、牧師館を何度も建ててきました。まさに、無から有の創造。そんな状況下で、私が代務を務めていた松山城北教会の牧会を助けるために、月に二回船に乗って、下関から松山まで通って、牧会をサポートして下さいました。その気力、体力には本当に頭が下がります。何より、「神のご用のためならば」との彼女の思いの強さがそこに現れています。無から有をつくり出す神に全てを委ねることの素晴らしさを、この本を通して多くの方々に知っていただきたいと思えます。

(し)のうら・ちふみ 日本基督教団さや教会牧師  
(四六判・一五四頁・本体二〇〇円+税・キリスト新聞社)

**ヨベルの新刊案内**

# 神の物語 上・下

マイケル・ロダール  
大頭 眞一訳 (明野キリスト 牧師)

独特な魅力があふれている本。キリスト教神学の全体(創造論～終末論)を、創世記に始まって黙示録まで、聖書を物語ることによって説明してくれる。来日講演と関野祐二先生の書下し解説を収録! ※待望の新書化!

●ヨベル新書・各1400円

タイムリーな処方箋があなたを変えてくれる!

## 落ちこんだら

正教会司祭の処方箋 171

好評発売中! \*四六判・三〇四頁・一六〇〇円

松島雄一訳 (大阪ハリストス正教会司祭)

門叶国泰 (日キ教団富士見町教会長)

藤盛勇紀牧師の礼拝説教

説教聴聞録

ルカによる福音書

新書判・三八四頁・一〇〇〇円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F  
FAX03(3818)4858 出版の手引き / 星  
\*自費出版の専門出版社\* (税別)

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1701F	022-223-2736	共用		fqcwks24@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	〒新中延町2-2 榎ヶ丘センタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-9230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.bigoboe.jp	sksch@mva.bigoboe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曾根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.bigoboe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mexim/	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	903-0207	中環読道字線777 沖縄キリスト教館内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

## ■教文館

キリスト教教父著作集第4巻Ⅰ

アレクサンドリアのクレメンスⅠ  
ストロマティス(綴織)Ⅰ

アレクサンドリアのクレメンス著  
秋山 学 訳

真に神を知る者とは何か。異端論争の中で、信仰と知の関係をい  
つめ、当時のあらゆる文化的教養を福音宣容の準備として評価し  
た、初期ギリシア教父クレメンスの著者。

A5判・496頁・本体8300円

## バレエ・シユーズ

ノエル・ストレートフィールド著  
中村妙子 訳

1930年代のロンドン。姉妹として育てられた3人の孤児の  
少女たちが、歴史に名を残すことを誓い合い、それぞれの天分と  
努力で自分の進む道を選んでいく物語。あの名作が新訳で登場！

四六判・224頁・本体1300円

## ■日本キリスト教団出版局

魂の不滅か死者の復活か

——新約聖書の証言から

オズカー・クルマン 著  
岸千年・間垣洋助 訳／辻学 解説

ギリシア人にとっては死は友であり、キリスト者にとっては最後

## INFORMATION

### 近刊情報

の敵である。しかしこの敵は、復活されたキリストによって征服  
され、キリストにあるすべての者のために打ち倒されている。ギ  
リシア的な靈魂不滅説と新約聖書の復活信仰を対比させて、私た  
ちが抱って立つ信仰をより鮮明にする。

四六判・88頁・本体1200円

## ■新教出版社

アメリカ現代神学の航海図

——栗林輝夫セレクション2

栗林輝夫 著  
西原廉太・大宮有博 編

名著『現代神学の最前線』の学術版とも言うべき大著を構想しな  
がら著者は病に倒れた。著者の没後、編者は既発表の論文から遺  
稿類にいたるすべてを徹底的に調査・校訂し、本来の構想をみこ  
とに復元した。フェミニスト神学、ウーマニスト神学、アジア系  
アメリカ神学、ポストモダンの神学、ポストリベラル神学、修正  
神学、プロセス神学等々、複雑かつ活発な運動を絶やさないアメ  
リカ現代神学をどう見るか——その鮮やかな見取り図がここにあ  
る。

A5判・464頁・本体予価5500円

カルヴァン政治思想の形成と展開

——自由の共同体から抵抗権へ

住田博子 著

16世紀当時のジュネーブにおける国家教会体制の政治学的・歴史  
的分析から始め、カルヴァン神学における政治の論理を内在的に分  
析した上で、歴史と思想の狭間でカルヴァン政治思想がいかにして  
形作られて展開されていったのかを綿密に跡づけた俊英の力作。

A5判・260頁・本体予価3000円

# 福音と世界

2018年1月号

特集

キリスト教と近代日本

「明治150年」を考える

寄稿者＝清水正之、山口陽一、小檜山ルイ、

勝呂奏、森島豊

新連載 地のいと低きところにホサナ プレ

イデイみかこ／好評連載 台湾キリスト教史

(高井ヘラー由紀)、福音の地下水脈(末井昭)

詩篇(月本昭男)、現代神学の冒険(匿名定道)

レビューナスの時間論(内田樹)ほか

A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

## 編集室から

目の前のものに集中し、何かを生み出す人に憧れます。イラストや工芸作品、デザイン、映像、音楽に至るまで……。本を生み出す過程にも、多様なスペシャリストが関わっています。編集の仕事をしていると、そういった方のお仕事ぶりを見たり、お話をしたりする機会も多く、それも楽しみの一つです。

たとえば装丁家です。装丁関連の本では、坂川栄治＋坂川事務所『本の顔——本をつくるときに装丁家が考えること』(芸術新聞社)をよく読み返しています。何気なく手に取った本も「坂川さんのデザインだったのか!」と驚くことがしばしば。カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』も彼の手によるものです。

「何となく惹かれる」「読みたい」という思いを引き出す「本の顔」をどうやって作るのか。文字、イラスト、色、紙、さら

には不採用案まで、試行錯誤の舞台裏を追う一冊です。

一方で、通勤中に電子書籍で読むことが増えました。文庫も開けないほど混雑した車内では、スマートフォンでの読書が快適です。画面下に「読み終えるまで〇%」「あと〇分」という表示が出たり、多くの人が線を引いた箇所が分かる機能があったりと、新しい読書のかたちが広がっていきます。

血が通わないデジタルのようで、誰かと一緒に読んでいる感覚があつて、また本が好きになりました。作り手の思いをのせた紙の本と、デジタルのつながりを縦横に掛け合わせた、ハイブリッドな読書が豊かな時間になると思います。

「図書館の貸本のために本が売れない」という発言があるほど出版状況は厳しく、専門書も例外ではありません。ただ、買っても借りても、紙でもデジタルでも、講演や読書会といったイベントでも、どちらもやわらかく取り入れつつ、読者を地道に増やすほかないように思えます。それも、一人ひとりの「本との出会い」、「本を読むことで、新しい世界が広がる」というおおもとの楽しさを忘れずに。本誌編集もそんな気持ちで取り組みたいです。(福永)

## 本のひろば 2018年2月号 予告

本・批評と紹介…『こころの賛美歌・唱歌』大塚野百合監修、『戦後70年の神学と教会』新教出版社編集部編、『松居直と絵本づくり』藤本朝巳著、『主日礼拝の祈り』越川弘英／吉岡光人監修、『二つの宗教改革』H・A・オーバーマン著、『ギレアド』マリリン・ロビンソン著、『信仰・希望・愛』宮原守男著他

遠藤周作と志をともし、「日本人とキリスト教」の課題を担った神父の著作選集

## 第2期 井上洋治著作選集

10

### 日本人のためのキリスト教入門

#### 井上洋治著作一覧

山根道公 編・解題 若松英輔 解説

最終回  
配本

慶應義塾大学における講義を『日本人のためのキリスト教入門』として初の単行本化。日本人に響く言葉でキリスト教をわかりやすく解説する。さらに、「井上洋治著作一覧」、高橋たか子氏の再録エッセイ、佐藤優氏の書き下ろしエッセイも併せて収録。

2018年春刊行予定

◆A5判 上製・予272頁・2,700円



シリーズ好評発売中 各巻2,700円

1 日本とイエスの顔

2 余白の旅—思索のあと

3 キリストを運んだ男  
—パウロの生涯

4 わが師イエスの生涯

5 遺稿集「南無アッパ」の祈り

6 人はなぜ生きるか

イエスのまなざし—日本人とキリスト教 抄

7 まことの自分を生きる／イエスへの旅

8 法然—イエスの面影をしのぼせる人

風のかなかの想い—キリスト教の文化内開花の試み 抄

9 南無の心に生きる

イエスをめぐる女性たち 抄

## 靈魂の不滅か死者の復活か 新約聖書の証言から

オスカー・クルマン 岸千年／間垣洋助 訳 辻学 解説

今なお必要とされる、死と死後の問題を神学的立場から明快に捉えた名著を復刊。ギリシア的な靈魂不滅説と新約聖書の復活信仰を対比させて、私たちが拠って立つ信仰をより鮮明にする。

2017年12月15日刊行予定

◆四六判 並製・88頁・1,296円



新年の読書のために

# こころの深呼吸 気づきと癒しの言葉366

片柳弘史



●A6判(文庫判)・390頁・本体900円  
インターネットで配信され、6万超の共感を集めたつぶやきを書籍化。まいにち頑張るあなたへ向けた言葉の贈り物。大切な方へのプレゼントとしても最適です！

# 朝の道しるべ 聖句断想366日

小島誠志



●A6判(文庫判)・400頁・本体1,500円  
好評の「聖句断想」シリーズから優れた黙想を精選、一日一章として再編集。日ごとに新しくみ言葉に出会い、生きるための力を与えられる珠玉の言葉。

12月の新刊 (価格表示は税抜)

あなたが生きる  
目的は何ですか？



子どもと共に学ぶ  
**新・明解カテキズム**  
●四六判 224頁・本体1,900円  
現代人に「生きる目的」を問いかけ、神との出会いへ導く信仰問答。好評であった『明解カテキズム』『続・明解カテキズム』(キリスト新聞社刊)を全面改訂し、合本にした新版。

# 日々の祈り 手引きと例文

鈴木崇巨



●四六判 196頁 本体1,500円  
暮らしの中で何を、どのように祈ったらよいのでしょうか？ 毎日の祈りのために、31日分の祈り、折々の祈りの例文を収録。神さまを「賛美」するための手引き書。

# キリエ 祈りの詩

ヨッヘン・クレツパー

富田恵美子・ドロテア／富田裕訳 森本二郎写真



●四六判変型 64頁・本体1,200円  
神の創造の神祕を写す森本二郎氏の写真と、十字架を見つめ、神にすべてを委ねたクレツパーの祈りが響き合う。



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549 (出版部)  
本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyokunkwan.com/>

e-shop教文館

一九五七年七月七日 第三種郵便物認可  
二〇一八年二月日発行(毎月一回日発行)

発行所 〒163-0814 東京都新宿区新小川町九一「一般財団法人キリスト教文書センター」  
電話〇三三三六〇一六五〇 振替〇〇七〇一五二六七九  
発行人 本村利春 編集人 土肥研 印刷所 (株)平河工業社  
日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三三三六〇一五六七〇

定価七八円(税抜七二円)千62円  
一年分三〇〇円(送料共)